

Title	関西中央部における「オル」・「～トル」軽卑化のメカニズム
Author(s)	井上, 文子
Citation	阪大日本語研究. 5 P.19-P.32
Issue Date	1993-03
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/7755">http://hdl.handle.net/11094/7755</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



今日、家にオル

という言い方もするが、「イル」が待遇的に中立な意味での人の存在を表すのに対して、「オル」は人の存在を表しつつ、心情的でぞんざいな言い方として捉えられている。

また、大阪では、

犬、鳴いテル

車、止めテル

などのような言い方の他に、

犬、鳴いトル

車、止めトル

などのような言い方もするが、「～テル」が待遇的に中立なアスペクトを表すのに対して、「～トル」はアスペクト表現の進行態・結果態を表しつつ、心情的でぞんざいな言い方として捉えられている。

ただし、これらの「オル」・「～トル」は上の「～ヨル」ほど卑罵的ではなく、下向きの程度が軽いという意味で、以下本稿では“軽卑語”と呼ぶことにする。大部分の西日本方言においては「オル」・「～トル」は、それぞれ、人の存在を表す中立待遇の動詞・中立待遇のアスペクト形式として使われているが、関西中央部においては「オル」・「～トル」は軽卑的な用いられ方をしている。そして、「イル」・「～テイル」が関西中央部では中立待遇の形式なのである。

岸江(1990)でも、「～ヨル」は待遇的側面が際立ち、「オル」・「～トル」は「イル」・「～テル」と比べて軽卑的で粗野である、と女性に限らず意識していることが報告されている。

本稿では、これらの形式の分布域の確定をし、その成立の事情を検討する。そして、フィールドワークによって得られたデータを基に現在の状況を概観する。

## 2. 「～ヨル」について

卑語形式としての「～ヨル」の分布域は、各地での方言記述や筆者のこ

れまでの調査を総合すると、図1のように示すことができる。卑語形式の「～ヨル」は、大阪府北部・兵庫県の大阪府に近接する一帯・京都府南部・奈良県北部・滋賀県・三重県などを中心とする地域である。

図1

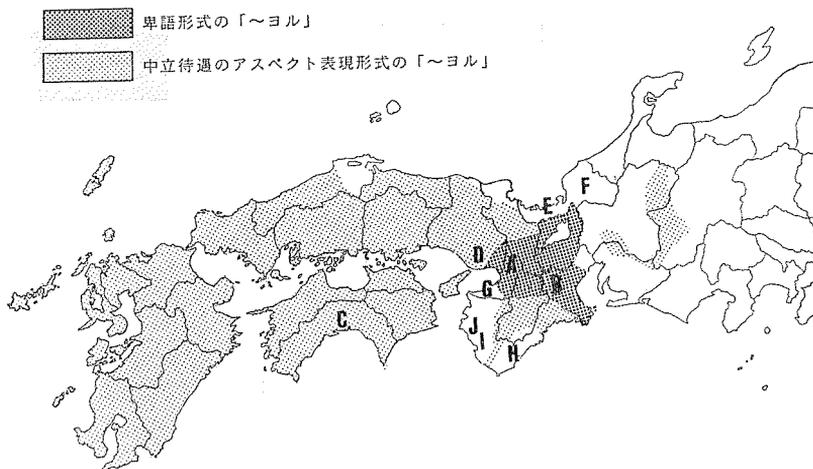
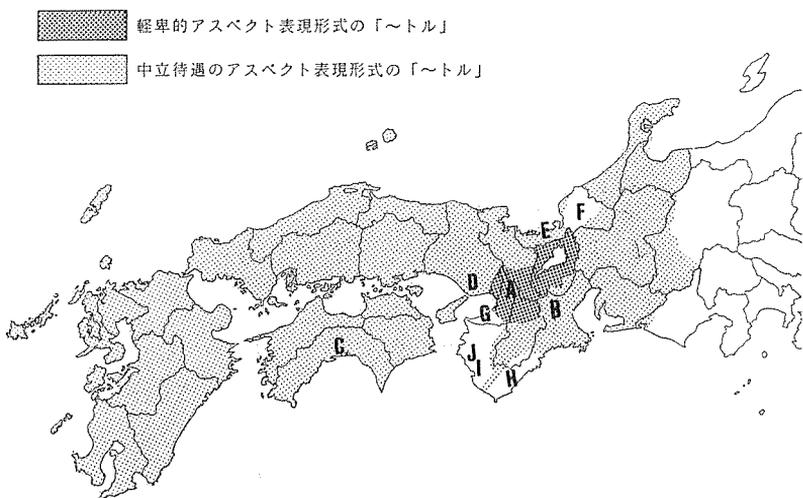


図2



存在動詞  
動くもの主語

アスペクト表現形式  
進行態 | 結果態

待遇表現形式

	存在動詞 動くもの主語	アスペクト表現形式 進行態   結果態	待遇表現形式
A	イル イテル オル	~テル ~トル	~ヨル
B	オル	~トル	~ヨル
C	オル	~ヨル   ~トル	
D	オル	~ヨル   ~トル	
E	オル	~トル	
F	イル	~テル	
G	イル イテル	~テル ~チャール ~タール	
H	アル	~ヤル   ~タール	
I	アル	~ヤル   ~タール	
J	アル	~チャール	

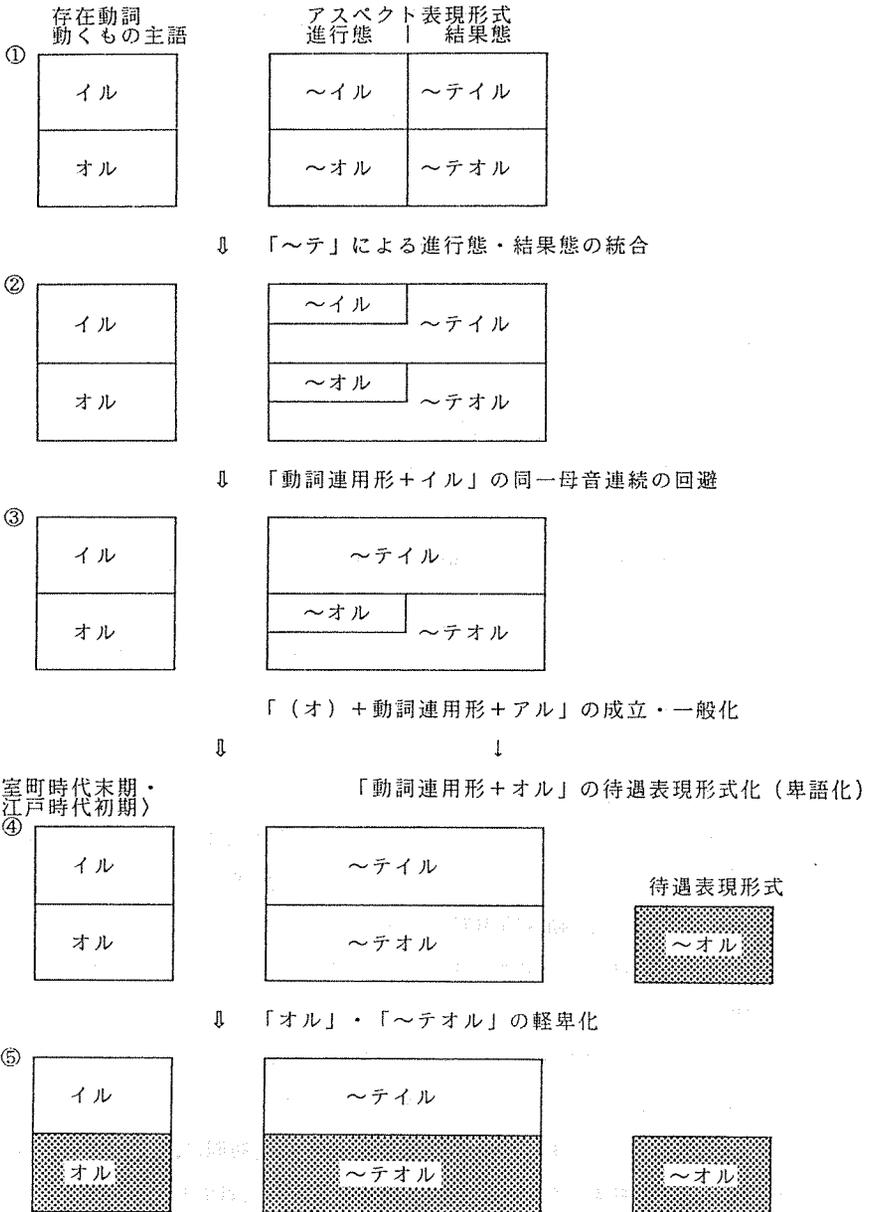
関西中央部を除く西日本の多くの地域では、「～ヨル」の形式は存在するが、それはアスペクト表現を担うものであり、卑語的使用は認められない。ちなみに、ここで「～ヨル」と言っているのは、「～オル」から派生した形式の代表形で、「～ヨル」だけでなく、「～ヨー」・「～ユー」などの形式も含んでいる。また、「～トル」についても、「～テオル」から派生した形式の代表形であり、「～トル」だけでなく、「～トー」・「～チャル」・「～チャー」・「～チュー」などの形式を含んでいる。

ところで、上に示した卑語化が生じたメカニズムについてまずふれておこう。関西中央部で「～ヨル」の卑語化が生じた前提として、アスペクト表現形式の統合があると筆者は考えるものである。

国語史上、「～オル」が卑語化したメカニズムについては、柳田征司のアプローチがある。ここではその論点を勘案しつつ、総合的な解釈を試みたい。

関西中央部では西日本の他の地域とは異なって、室町時代中期の『史記抄』にすでに存在動詞としての「イル」が見られる。一方、アスペクト表現形式「～イル」・「～テイル」はそれより古い時代にもすでにあった。それと並行して「オル」があり、「～オル」・「～テオル」もあることが文献で確かめられる。したがって、この時点では「～イル」と「～オル」とがアスペクトの進行態を表していたわけである(図3①)。その後、助詞「～テ」を介しての進行態・結果態の表現形式上の統合が起こって、本来結果態の形式であった「～テイル」・「～テオル」が進行態をも表すことになった(図3②)。なお、動詞連用形の [i] の音につくことが多かった「～イル」は、動詞連用形末尾の [i] と「～イル」の [i] という同一母音の連続を避けるということもあって、「～テイル」にとってかわられる形で消えていった(図3③)。この時点で進行態を表す形式としては「～テイル」・「～オル」・「～テオル」の3形が存在することになったわけである。折しもこの段階、すなわち室町時代末期・江戸時代初期に、前代から一般的であった敬語形式「(オ) + 動詞連用形 + アル」に対応して、「動詞連用形 + オル」がそれと対比的に卑語形式として認識されるようになったと推

図3 関西中央部における「～オル」・「～テオル」・「オル」の変遷



測されるのである(図3④)。

ただ、「～オル」の卑語化に関しては、「～アル」と「～オル」との対応が意識されただけではなく、この変化が生じる背景には、アスペクト表現が「～テイル」や「～テオル」で表しえたということがありと考えられる。つまり、「～オル」が卑語化しても、進行態を担うことのできる他の形式が併存していたということが大きく関わっていると推測されるのである。

一方、関西中央部を除く西日本では、アスペクト表現形式の進行態と結果態との統合が起こらず、その機能分担は、「～オル」と「～テオル」の形ではっきりとなされていた。これらの地域では、敬語形式「～アル」の定着のいかんにかかわらず、「～オル」が卑語化すると進行態のアスペクトが表せなくなるために「オル」の卑語化は起こらなかったのである。いわゆる同音衝突が避けられたわけである。奈良県南部や京都府丹波地方、兵庫県西部などをはじめ、大部分の西日本方言がこのケースである。

ところで、内的変化として、進行態に「～テオル」が浸透し、「～オル」が追い出されつつある地域、あるいはその変化が完了し、現在「～テオル」だけでアスペクトが表されるようになった地域、たとえば、前者としては、神戸市など、後者としては、若狭地方・三重県四日市以北・美濃尾張地方の一部などでは、逆に、卑語形式となった関西中央部での「～ヨル」を受け入れる素地を持つことになったわけである。筆者の調査によれば、これらの地域のうち、神戸市東灘区、兵庫県多紀郡篠山町などの若年層では、関西中央部で独自に待遇化した「～ヨル」を受け入れつつあることが認められる。ただし、これはアコモデーション的使用の要素も含んでのことである。いずれにしても、この地域は図1で示した「～ヨル」の卑語化地域との境界付近にあたるわけである。

つまり、「～ヨル」・「～トル」で進行態・結果態を言い分けていたのが、「～ヨル」が消え、「～トル」で統合したことによって、〈オル〉系統の体系の空き間に卑語の「～ヨル」が入って来ていると言うことができる。

なお、関西中央部に隣接しているにもかかわらず、現在、大阪府南部や福井県北部では「～ヨル」の侵入は起こってはいない。それには、たとえ

ば、「(雨が) 降る」の例で言うと、大阪府南部では〈イル〉系統の「降ッテル」という形が進行態に、〈アル〉系統の「降ッチャール」・「降ッタール」という形が結果態に用いられていること、福井県北部では〈イル〉系統の「降ッテル」という形が進行態と結果態との両者に用いられていることが関わっているように思われる。存在動詞やアスペクト表現形式に何らかの形で「オル」や「〜トル」などの〈オル〉系統の語が存在しないところでは「〜ヨル」の侵入が阻まれる傾向があるようである。つまり、逆に言えば、進行態の「〜ヨル」が消えつつあるところに卑語形式の「〜ヨル」が入りやすいのだと考えられる。

### 3. 「オル」・「〜テオル」の軽卑化

ところで、存在動詞「オル」の軽卑的使用が認められる地域は、ほぼ図2の分布と重なっている。京阪神・奈良県北部・滋賀県を中心とする地域である。この領域は「イル」の使用地域でもある。すなわち、「オル」の軽卑的使用の前提には、必ず「イル」との併用があるわけである。

また、アスペクト表現形式「〜トル」の軽卑的使用が認められる地域は、図2のように示すことができる。大阪府北部・兵庫県の大阪府に近接する一帯・京都府南部・奈良県北部・滋賀県を中心とする地域である。この領域は「〜テル」の使用地域でもある。ここでも、「〜テオル」の軽卑的使用の前提には、必ず「〜テイル」との併用があることになる。

ここで、図1と図2とを総合して、それぞれの地域での存在動詞、アスペクト表現形式、待遇表現形式（卑語）、軽卑語について整理しておく（井上1992）。

Aは、動くものが主語の場合の存在動詞として「イル」（「イテル」）・「オル」を使用する地域である。アスペクト表現形式としては、進行態にも結果態にも〈イル〉系統の「〜テル」・〈オル〉系統の「〜トル」を用いるが、「オル」・「〜トル」には軽卑的要素が加わっている。また、卑語の「〜ヨル」を使用する。大阪府北部、京都府南部・兵庫県の大阪府に近接する一帯・奈良県北部・滋賀県がこの体系である。

Bは、存在動詞として「オル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈オル〉系統を用い、進行態も結果態も「～トル」で表す。これらの「オル」・「～トル」には軽卑的要素はない。また、卑語の「～ヨル」を使用する。三重県中部・京都府丹波地方がこの体系である。

Cは、存在動詞として「オル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈オル〉系統を用い、進行態は「～ヨル」、結果態は「～トル」という使い分けが存在する。これらの「オル」・「～ヨル」・「～トル」には軽卑的要素はない。高知県など、関西を除く西日本におもに分布する体系である。

Dは、存在動詞として「オル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈オル〉系統を用い、進行態を「～ヨル」・「～トル」、結果態を「～トル」で表す。この「オル」・「～ヨル」・「～トル」には軽卑的要素はない。兵庫県西部をはじめとして、関西を除く西日本におもに分布する体系である。

Eは、存在動詞として「オル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈オル〉系統を用い、進行態も結果態も「～トル」で表す。これらの「オル」・「～トル」には軽卑的要素はない。福井県若狭地方・島根県出雲地方・隠岐・富山県・石川県・岐阜県の大部分・愛知県の大部分・長野県の大部分などがこの体系である。

Fは、存在動詞として「イル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈イル〉系統を用い、進行態も結果態も「～テル」で表す。福井県北部の大部分をはじめとして、東日本に広く分布する体系である。

Gは、存在動詞として「イル」(「イテル」)を使用する地域である。アスペクト表現形式は、進行態を〈イル〉系統の「～テル」、結果態を〈アル〉系統の「～チャール」・「～タール」で表す。大阪府南部がこの体系である。城野(1992)によれば、「～チャール」は岸和田市以南で、「～タール」は高石市・泉大津市・和泉市・忠岡町で用いられることが報告されている。

Hは、存在動詞として「アル」を使用する地域である。アスペクト表現

形式は〈アル〉系統を用い、進行態は「～ヤル」、結果態は「～タール」という使い分けが存在する。和歌山県三重県境付近や和歌山県最南端がこの体系である。

Iは、存在動詞として「アル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈アル〉系統を用い、進行態を「～ヤル」・「～タール」、結果態を「～タール」で表す。和歌山県南部西部海岸部や三重県南部がこの体系である。

Jは、存在を表すのに「アル」を使用する地域である。アスペクト表現形式は〈アル〉系統を用い、進行態・結果態を「～チャール」で表す。和歌山県西部海岸部がこの体系である。

なお、G～Jに関しては、井上（1989）においても考察している。

柳田（1990）には、「オル」と「～テオル」の軽卑化の契機について、次のように述べられている。

「(オ+)動詞連用形+アル」が広まって来ると、進行態の表現「動詞+オル」が、これと対比的に意識されるようになり、卑罵表現となっていくのであろう。そのような「オル」が一般化して来ると、本動詞の「オル」も、「イル」に対して卑下・軽卑の表現となったものと見られる。「テオル」もまた「テイル」に対して卑下・軽卑の表現となった。(中略)「動詞+オル」の例が卑罵表現となったのにひかれて、本動詞「オル」や「テオル」が変化したのであったために、本動詞の「オル」や「テオル」が、「イル」「テイル」に対して卑下・軽卑の表現にとどまり、卑罵表現にまでなっていないものと見られる。

これによれば、「～ヨル」の影響によってのみ「オル」・「～テオル」が軽卑化したというように読み取れる。しかしながら、これらの変化に関しても、やはり、その時点において「イル」と「～テイル」が併存形として存在していたことが関わっていると考えられる。「オル」は中立待遇の存在動詞「イル」との、「～テオル」は中立待遇のアスペクト表現形式「～テイル」との対応が意識されるため、待遇度がそれほど下がらず、軽卑化

## ⑧ おとせさん宅に居やはるかへ（「胴乱の幸助」 幸助→若者）

にとどまっているわけである（図3⑤）。

一方、前に述べた「～ヨル」は対応する中立待遇の Aspekte 表現形式が存在しなかったために、本来の機能を失い、完全に待遇度が落ちて、卑語形式になってしまったのであろうと考えられる。

このような様相は、現在の関西中央部での使用意識とも一致する。ただし、本動詞「オル」に関して言えば、たとえば、大阪と滋賀とでは若干の運用上の相違が指摘できるようである。

宮治（1990）では、待遇される人物として、7者を設定し、これらの人物に直接話しかける場合とこれらの人物を話題にした場合の存在表現を尋ねている。それによれば、話し相手待遇の場合、大阪では父親・子供・友達・弟妹には「オル」が格段に多く使われるのに対して、滋賀ではどの人物においても「オル」がほとんど用いられない。また、第三者待遇の場合、大阪ではどの人物においても「オル」の使用率が高いのに対して、滋賀では子供・友達・弟妹に限定される形で「オル」が用いられる。

この解釈として宮治（1990）は、大阪において「オル」が待遇的に中立化したとしている。しかし、大阪と滋賀では、これらの人物のどこまでを目上と意識するかという差が、「オル」の使用状況に反映しているように思われる。特に父親の捉え方が問題となる。大阪は父親の位置を“上”というよりも“親”，自分に近いものと見なす比較的自由な人間関係であり、いわば新しい制度を取り入れている。つまり、「オル」の使い分けは第一に親疎関係によって規定されるという状況にある。これは心情によって規定される新しいタイプの敬語，相対的敬語であると言えるであろう。また、「オル」が多用されるのは、ぞんざいな表現を許す自由な地域だからだとも解釈できる。これに対して、滋賀は父親の位置を“上”と見なす固定的な人間関係であり、旧制度的なものを残している。つまり、「オル」の使い分けは第一に上下関係によって規定されるという状況にある。これは身分によって規定されていた古い形の敬語行動の名残とも言えるであろう。

大阪と滋賀のこの差は、その社会的背景の違いによるものと思われる。

商業都市としての大阪は、社会状況や人間関係が流動的・進取的であるために、早く相対敬語に移行したのであり、一方、滋賀は、社会状況や人間関係が固定的・保守的であるために、古いタイプの敬語を保ち続けているのであろう。このような仮説に基づく枠組みで「オル」の運用差の実態が説明できるように思われる。すなわち、「オル」が大阪で待遇的に中立化したという解釈ではなく、「オル」自体の意味は変わらないとして、待遇表現上の場面の把握の仕方の差が、大阪と滋賀との違いを生み出していると筆者は解釈するわけである。

ところで、柳田（1990）では、上述のように卑語形式「動詞連用形+オル」の出現以降、その類推によってのみ、本動詞「オル」が下位待遇化したと説かれるように読み取れるのであるが、実は、その時点以前に、本動詞「オル」自体に文体的なニュアンスがあったことも、この変化を促したと考えたい。

中古の「ヲリ」に関しては、阪倉（1977）・柳田（1990）のように待遇化を否定する立場と、田中（1959）・橘（1977）・沼田（1979）・金水（1983）のように待遇化を認める立場とに分かれる。金水（1983）によると、「ヲリ」が意味変容をした時期は、中古第二期、『蜻蛉日記』以降と推定できると言う。しかし、この時期に急に「ヲリ」を待遇化させる要因があったわけではないことなどを考えあわせると、この時期の「ヲリ」は下位待遇というほどのものではなく、柳田（1990）が主張するように、「タリ」の隆盛によって「〜キタリ」という言い方が可能になったために「キル」が勢いを持ち、その「キル」に押された「ヲリ」が古い表現形となってしまったというだけのことかもしれない。この状況が「ヲリ」に古い、堅いといった文体上のニュアンスを付与したのであり、それは劣勢になってしまった語へのマイナ斯的イメージであろうと推定される。そのように考えれば、和文資料において重要ではない人物に「ヲリ」が使われていることなども説明できるように思われる。

このように、「ヲリ」に古くから付随していたと推定されるマイナ斯的

ニュアンスが、後に、「オル」・「～テオル」を下位待遇へと変化させた潜在力ではなかったかと考えるわけである。

なお、現代のように、「オル」や「～トル」を使用する地域にも、標準語としての「イル」や「～テル」が広がって、「イル」と「オル」とが併存しつつある状況においては、「イル」や「～テル」がフォーマルな場での使用形、「オル」や「～トル」がインフォーマルな場での使用形としての使い分けが生じている。しかしながら、これは上で述べた待遇化現象とはレベルの違う問題である。

#### 4. ま と め

最後に、本稿の要点をあげておく。

まず、「～ヨル」に関して、

- (1) 「～ヨル」が卑語形式として独立した背景には、歴史的にアスペクトの統合が関与していたと考えられること。
- (2) 各地でそれぞれに記述されていたものを総合して、卑語形式の「～ヨル」の分布域がほぼ確定できたこと。

次に、「オル」・「～トル」に関して、

- (1) 「オル」・「～トル」の軽卑化の前提として、「イル」・「～テル」が併存形として存在していたと考えられること。
- (2) 個別の記述を総合して、軽卑化した「オル」・「～トル」の分布域がほぼ確定できたこと。
- (3) 軽卑の「オル」・「～トル」の領域内でも、具体的には微妙な運用の差があるが、それは待遇表現上の場面把握の差であると解釈されること。

#### 参考文献

- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一／編(1982～1984)『講座方言学』4～10 国書刊行会
- 井上文子(1989)「紀伊半島海岸部方言におけるアスペクト表現——イル・オル・アルに焦点をあてて——」『日本学報』8 大阪大学文学部日本学研究室
- 井上文子(1992)「「アル」・「イル」・「オル」によるアスペクト表現の変遷」『国語

学』171

岸江信介（1990）「昭和」における大阪市方言の動態『国語学』163

金水敏（1983）「上代・中古のキルとヲリ——状態化形式の推移——」『国語学』

134

阪倉篤義（1977）「語りの姿勢——「をり」の消長をめぐって——」『文学』45 岩波書店

城野博文（1992）「大阪府南部地域における言語の動態——アスペクト表現形式に焦点をあてて——」『地域言語』4 天理・地域言語研究会

橋誠（1977）「源氏物語の語法・用語例——「をり」と「みる」と——」『国語研究』40 國學院大学国語研究会

田中重太郎（1959）「「をり」の待遇語法について——語彙中心に——」『講座解釈と文法』3 明治書院

沼田貞子（1979）「存在を表す「あり・をり・みる」について——中古の仮名文学作品における比較を中心に——」『山口国文』2 山口大学文理学部国語国文学会

平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野 眞・久野マリ子・杉村孝夫／編（1992）『現代日本語方言大辞典』1 明治書院

宮治弘明（1990）「近畿中央部における人を主語とする存在表現の使い分けについて——アンケート調査から見た若年層の実態——」『阪大日本語研究』2 大阪大学文学部日本学科（言語系）

柳田征司（1990）「近代語の進行態・已然態表現」『近代語研究』8 武蔵野書院

※本稿は、平成4年度国語学会秋季大会（1992年10月：大分大学）において口頭発表したものを加筆修正したものです。発表の場で貴重なご助言をいただいた、金水敏、佐藤栄作、増井金典、山口幸洋の各先生方に心からお礼申し上げます。

（本学大学院生）